

提言 The SUISHIN

日本推進技術 (The SUISHIN) 海外定着に向けた心構え

いしかわ かずひで
石川 和秀

(公社)日本推進技術協会
専務理事
(本誌編集委員長)



我が国の推進技術は、1948年（昭和23年）に創出されて以来、60年を超える歴史を刻み、進化、発展してきた。当初、口径600mmの鋳鉄管を、軌道下に延長6m、シップジャッキで押し込んだ原始的技術が、掘進延長は優に1kmを超え、自在にカーブを描けるまでに進化した。推進する管材も、口径は4mに至り、丸管はもとより矩形函体をもこなす。さらに、掘進対象地盤は、超軟弱地盤から砂礫、粗石、巨石、岩盤まで、国内で出現するあらゆる地盤に対応すると言って過言ではない。しかも、その施工精度はミリ単位。これらの成果はすべて、昭和40年代以降、全国の下水道整備の進展にあわせ、推進技術に投げられた種々多様な課題、要求に逐一対処し、克服してきた結果だ。

その世界最高水準に達した日本推進技術に、東南アジア、中東諸国から熱い視線が寄せられている。彼国の主要都市では、その経済発展を反映して、瀟洒な近代的高層ビルが林立している。しかし、一度視線を落とせば、街中の幹線道路は二輪車から四輪車への乗換えが進み、日中を通じた交通渋滞は過激さを増した。また、本来、道路下に整備されるべき排水基盤は、ほぼ手付

かずの状況だ。未処理の汚水が滞留し、一雨あれば道路の至る所で冠水する。このまま放置すれば、早晩、自国の経済発展の足を止める、と彼国の政府高官は自覚した。この状況下で、早期に、道路下に排水基盤を構築しようとすれば、彼らが注目するのは、長距離、曲線推進が自在となる日本推進技術ではない。当然の帰着だ。

彼らの熱い要望と期待にどう応えるか。双方に達成感を自負できる「Win・Win体感」を獲得するには、どう対処すべきか。その心構えを確認、確立すべき時は今でしかない。

その根本は二つ。

第一は、彼国の排水基盤整備は、彼ら固有の最大課題であり、彼らの主体性を失わせたり、薄めてはならないことだ。彼らが日本推進技術を頼り、活用するとしても、単に、有益な技術を日本から購入、導入することに止まらず、彼ら自身が身に付け、習得できる技術でなければならない。高価な既製服を、借り物のごとく身に羽織るに止まらず、自らの創意、工夫により、自分らしく着こなすようにならないと、満足感、達成感は得られないはずだ。

そのためにはどうするか。彼国での

推進工事を日本から技術者集団が大挙して押しかけ、完璧仕上げ、それを置き土産として退去するでは、彼らに達成感は沸かない。彼らに高度な日本推進技術を一步一步伝授し、その習得をサポートして行くことが肝要だ。日本推進技術の海外定着化プロセスの中にこそ、互いの達成感が生じる。そこは山本五十六語録「やってみせ、言って聞かせて、させてみて、ほめてやらねば、人は動かじ」の世界かもしれない。

そんなことをしたら、日本の推進技術を盗まれてしまう、といった懸念を抱く者がいるかも知れない。何と気弱な発想か。日本で60年を掛けて培った世界最高水準の推進技術は簡単にコピーできるものではない。今後、彼らが20年、30年掛け、自らの排水基盤整備を通じ、少しでも現在の日本レベルに追付こうであって、彼らにとっても容易なことではない。一方、彼らに日本技術者が寄り添うことによって、日本側に新たな技術進展が期待される。それでこそ「Win・Win」が成立する。

第二は、日本推進業界にとって、彼国の推進市場は「単なる商売の場」ではないことを自覚確認し、徹底することだ。彼国では、日本の現有推進技術を

最大の頼りとし、経済発展に取り残された都市排水基盤の整備に取り組むことを国家的急務としている。決して短期、集中的なプロジェクトでは終わらない。彼らの事業進展に沿って、我が国推進業界は、今後20、30年間にわたる事業パートナーとなる。その永き事業過程で生じる推進関連資機材の販売や施工管理技術指導などのやり取り、交易も、決して一過的な取引では終わらない。彼らが目指すプロジェクトの成功裏での達成には、互いの長期安定した強い信頼感に基づく連携が不可欠だ。正に、国対国での信頼関係の構築だ。それは、個々の推進関連企業の誠意と努力で得られるものではない。そのためには、日本推進業界の総意と総力の結

集が不可欠となろう。ここに「推進・チーム日本」結成の必然性がある。

チーム競技となれば、個々の選手が有する能力の総和より、チームとしての実力が上回るはずだ。個々の選手（企業）が有する能力が十二分に発揮できるよう、周辺選手がサポートし、その環境条件を整える。エースストライカーも、ある局面では、アシスト、サポート役を演じる。それがチームの実力だ。ここでは、個々の選手の独りよがりな個人プレーは許されない。チームプレーの鉄則だ。

また、チームの総力は、決して、ゲームに直接参加する選手だけでは量れない。そこには、チーム活動を外から温かく見守るサポーターが必要だ。すなわ

ち、東南アジア諸国で直接活躍する「推進・チーム日本」の各企業活動を、国内でサポートする推進関連企業の存在は、日本推進技術の海外進出、定着化のためには欠かせない。国内業務に留まる推進企業にとって、海外進出する企業の活動は、決して他人事と思っ

てはならない。日本推進業界全体の業務活動の一端と捉えるべきである。近い将来、東南アジア諸国が目指す真の近代都市づくり実現に必要な排水基盤整備に、日本推進技術が貢献し、絶大なる賞賛を受けるとともに、その魅力ある技術が、都市のさらなる発展、進化のため、彼の地への穏やかな定着化が進むことを切に望む。

謹んで新年のご挨拶を申し上げます



旧年中は、月刊推進技術をご愛読賜りまして厚く御礼申し上げます
本年も一層誌面の充実を図るため倍旧の努力を続けて参ります
これからもご愛読ご指導よろしくお願い申し上げます
平成27年元旦

月刊推進技術 編集委員・編集室スタッフ一同